

プロローグ

空を仰ぐと満点の星空が広がっていた。きれいだ……。やっと、久しぶりに、心の底から星をみてそう呟けた。そんな気がした。やっと……。やっと、夢がかなう。夢にまでみた、念願のこの思いが今、天井の星空に届こうとしている。後悔なんてない。それどころか胸の中には希望以外のなにもでもない、満点の星空と同じように美しい輝きを秘めていた。そう……。後悔などあるものか……。冷たく透き通った空気をゆっくりと吸い込み、それで肺をいっぱい満たす。大丈夫。もう、大丈夫だ。そつと、手のひらを星空にかざし、その名前を静かに、だがはつきりと、確実に、ゆっくりと呪文のように唱えた。